

南三陸の現状・課題・可能性 補足資料

<山関連>

○担い手の減少、一次産業付加価値額の減少

→資料 1-3 を参照

○FSC 認証

FSC 認証：「FSC (Forest Stewardship Council、森林管理協議会)」が認証する森林のエコラベル。持続的な資源活用を目的に、責任ある森林管理を認証する国際的な環境認証制度。FSC のマークが入った製品を買うことで、消費者は世界の森林保全を間接的に応援できる仕組み。南三陸町では平成 27 年 10 月、民間事業者と町がつくる南三陸町森林管理協議会が宮城県内初の FSC (FM) 認証を取得。

しかしながら FSC の認証取得後の PR や付加価値向上に対する取組はこれからの課題となっている。

○南三陸材のペレット

南三陸町産業バイオマス都市構想に描かれていた町内の材を利用したペレット製造事業であるが町内の需要がまだ十分でないため、町内の事業化には踏み切れていない。

もしこれが実現すれば C 材と言われる、品質が中程度の材の有効活用に繋がる。

○山さございん

南三陸の森林資源を高付加価値化しようとしたプロジェクト。

南三陸杉の高付加価値化をテーマに 2015 年度にデザイン塾を開催した。

○フォレストック認証

フォレストック認定制度は、「フォレストック認定制度規定集」に従った制度全般の公正な運用及び「森づくりにおける森林吸収源・生物多様性等評価基準」に従った森林の管理・経営レベル、生物多様性の保全レベル、森林吸収源 (CO₂ 吸収量クレジット) の適正な調査手法及びそれに基づく森林の評価を根幹としている。

NTT ドコモはフォレストック認定制度を通じて宮城県南三陸町の森林保全支援をスタートする。NTT ドコモは、フォレストック認定を受けた南三陸町町有林の CO₂ 吸収量クレジットを購入される。このことにより、その約 45% の森林保全活動や雇用の創出につながるもので、東日本大震災により甚大な被害を受けた南三陸町の森林、地域社会、経済が再生・活性化するきっかけになると期待される。

(フォレストック協会ホームページより)

<里関連>

○担い手の減少、一次産業付加価値額の減少

→資料 1-3 を参照

○無農薬ササニシキの CSA 事業

CSA・・・Community Supported Agriculture の略。

文字通り、コミュニティが農業を支える仕組み。通常の農業では生産されたものを流通を通じて消費者が売買するが、この場合農家は不作の場合は自己責任、豊作の場合でも流通価格の下落によりどちらにしてもリスクを負うことになる。

CSA では作付け前に一定収穫量を農家を応援するコミュニティが購入を契約し、不作になっても代金を支払い、豊作になっても予め決めた購入金額を支払うので上記のリスクがヘッジされ、消費者にとっても顔の見える安心安全な作物を手に入れたり、食のことを学ぶ機会提供が獲得できたり、と双方にとってメリットがある。

南三陸町では東北食べる通信を通じた入谷の農家を作る無農薬のササニシキの CSA が一部始まっている。

○米の買い取り価格

平成 27 年度の宮城県のひとめぼれの相対取引価格は 60kg あたり 12,821 円。

現代農法では 1 反 (1000 m²) から約 600kg が収穫できると言われている。

つまり 1000 m²の田んぼを一年間管理して米を育てても 128,210 円の収入にしかない。

○液肥を使ったネギ・菊・トウキの栽培

南三陸 B10 で生成させた液肥を使った作物の栽培が、地元の農家の間で広がり始めている。作物育成の初期段階の窒素が必要なフェーズで有効と言うことがわかってきているが、まだ扱いが難しくプロの農家が勤をもとに使いこなしているのが現状である。

<町関連>

○南三陸 B I O (びお) のスタート

南三陸産業バイオマス都市構想の中核をなすバイオガス施設。

2014 年 7 月に南三陸町とアミタ(株)は南三陸町バイオマス産業都市構想の実現に向けバイオガス事業の実施協定を締結。

そして 2015 年 10 月にアミタ(株)の民設民営で南三陸 B10 を完成させバイオガス事業の運用をスタートさせた。

南三陸 B10 は南三陸町の住宅や店舗から排出される生ゴミやし尿汚泥など、有機系廃棄物を発酵処理し、バイオガスと液体肥料(液肥)を生成する。

バイオガスは、発電に用いるなど主に施設内で利用し、液肥は農地に散布する。

課題は、取組に関する住民への可視化が十分でなく生ごみの収集率が思うように上がっていない。

○ペレットストーブの導入

南三陸町産業バイオマス構想においては、町内で、林地残材などの未利用資源をベースにした原材料の調達～ペレット製造～ペレット販売～ペレット利用が計画されているが、そのうち、ペレット利用の部分においてペレットストーブの導入が一部進んでいる。

南三陸病院、南三陸町の仮庁舎へ導入済み、新庁舎への導入も決定している。家庭向けには実証事業によりモニターとしての協力利用、その後多くの家庭で買い取りが進んだ。

その後、町が「南三陸町木質バイオマスエネルギー利活用推進協議会」を設け、購入に対する町の補助(補助率: 1/2, 上限額: 県補助金との併用で最大 35 万円)始まっており、ペレットストーブの良さを知っている家庭には一部導入が進んでいるが、さらに普及を進めるためには今後ハウスメーカーの設計メニューにどう入れるかが課題となっている。

○MMR

地域資源を活用した新規ビジネスを創出するために森林、運輸、建設に関わる南三陸町の有志が立ち上げた株式会社。現在、MMR がペレットの販売事業を民間で運営している。MMR は Minamisanriku Marvelous Resources の略称。

<海関連>

○担い手の減少、一次産業付加価値額の減少

→資料 1-3 を参照

○ASC 認証

「ASC (Aquaculture Stewardship Council : 水産養殖管理協議会)」が認証する養殖版のエコラベル。環境に大きな負担をかけず、地域社会や人権にも配慮して操業している養殖場を認証し、その養殖場で育てられた水産物であることが一目でわかるよう、エコラベルを貼付して消費者に届ける制度。宮城県漁業協同組合志津川支所が南三陸町戸倉地区のカキ養殖場について、平成 28 年 3 月 30 日、日本初の ASC 認証取得。

しかしながら、FSC 同様に ASC の認証取得後の PR や付加価値向上に対する取組はこれからの課題となっている。

○海さございん

山さございんのコンセプトを受けて、海の資源の高付加価値化に取り組むべく 2016 年に立ち上がったプロジェクト。特に戸倉の ASC の牡蠣の高付加価値化をテーマにしている。

<海・里・山全般>

○自然環境活用センター

平成 11 年に元筑波大学教授横濱康繼氏が所長となり現在の形（生物たちの営みを観察し、学ぶための施設）としてスタート。

町が直営（町が設置し、職員を配置して運営）。活動の資金源は主として町の予算と時に国などの補助金など。

東日本大震災後は、産業振興課水産業振興係により、復旧作業と一部の活動の継続がなされている（自発的に生まれた組織として「友の会」も一部活動を引き継いでいる）。

現在「ネイチャーセンター準備室」は存在するが、組織上の位置づけはない。

南三陸町震災復興計画では、平成 30 年度に自然環境活用センターの復旧整備推進が完了する予定とされている。

<観光交流関連>

○教育旅行の受け入れ

南三陸町観光協会により震災前から進められていた教育旅行の受け入れが震災後に復活してきている。入谷地区の民泊受け入れを中心に人に触れ南三陸町での暮らしを体験するプログラムが人気で平成 27 年度の教育旅行受け入れ者数は 3500 人を超えた。

○南三陸応援団

南三陸に訪れていただいた震災ボランティアの方々に改めて町と繋がってもらい、力になってもらうためのプラットフォーム。会員登録制で登録者はバッジがもらえる。おでつて情報や町の情報を発信する Web ページやメーリングリストを整備。団員は 2000 名を超えた。